

野鳥たより

—北海道—

第 2 9 号

編集者 北海道野鳥愛護会
発行者 北海道国土緑化推進委員会
発行日 昭和52年9月21日



タシギ ウトナイ沼にて 1976年8月22日 撮影 小山政弘

尾岱沼原野の野鳥

昭和52年春～夏の生息記録

三 浦 二 郎

1. はじめに

「尾岱沼原野」という呼称はふつう使われておりません。尾岱沼といえば、冬のオオハクチョウ、夏は野付半島のアカアシシギという具合で、鳥仲間では水鳥観察地のイメージが大きいでしょうし、また地元の人でも単に「原野」とは言っても「尾岱沼原野」という言い方はしておりません。しかし、あえて私は、私の観察フィールドに「尾岱沼原野」なる新称をつけました。なぜなら、概要図に見るとおり、海岸から3kmの内陸部への原野での毎朝の観察で、水鳥らしきものを見たのは渡りの途中の上空通過群の2～3種しか観察できない——つまり、水鳥の尾岱沼というイメージとは全くかけはなれた原野の鳥だけの生息フィールドだからです。

私が尾岱沼の野付中学校に勤務するようになってから3年目です。初年度は尾岱沼全般の野鳥生息状況の概要を把握するということが、特にフィールドをきめての集中観察をやりませんでした。昨年はこの尾岱沼原野で春～夏の観察を継続しました。今年と同じにロードセンサス法で記録もとり、たしかにすぐれたフィールドであることを認識したのですが、概要図にある2km地点までの観察で止まっておりました。2km地点の先の牧草畑を過ぎて保安林まで行けばもっと面白いだろうなと思いつつ、そこまで足をのばす時間的余裕が、いろいろな事情もからんでつつい出来かねておりました。今年3月1日からほとんど欠かさず3km地点までのセンサスを実行して、そろそろどの鳥も巣立ち、群形成の時期に近づきました。その記録を中間的にまとめて報告する次第です。

2. 観察の方法

毎朝5時に自宅を出発して、3kmまで1時間半をかけてセンサスし、折り返しの帰路は約30分、往路で出現しなかった種だけ補遺

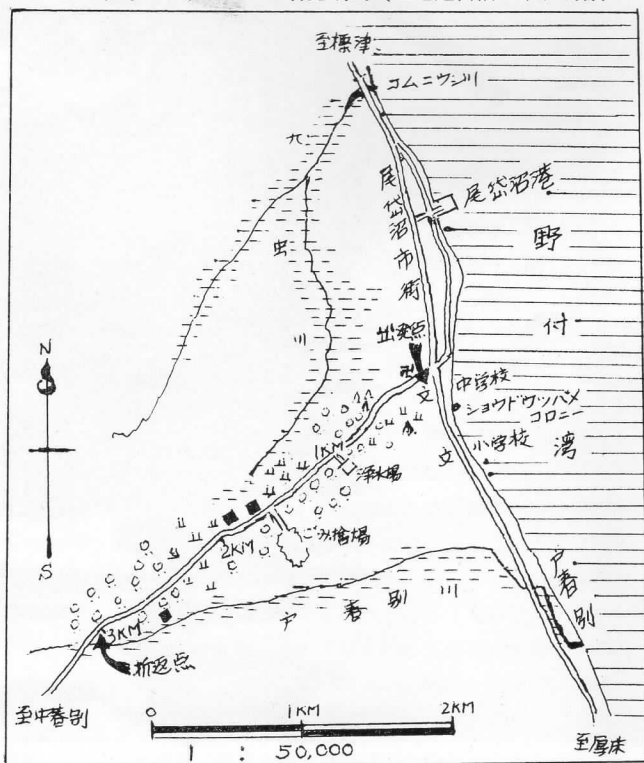
的に記録に加えて、7時に帰宅、朝食をとって学校に出勤するという日課です。ただし、強風や、雨雪の日は休みます。そういう日は野鳥達は黙りこくって姿をひそめているので、記録にムラが出来るからです。また出張等で用務のある日は当然欠測になりますから、平均して10日に5～6日の観察になります。

観察幅は道の両サイド25mと心掛けていますが、必ずしも厳密ではなく種類によっては若干幅を広めて記録に入れました。

3. 記録の整理

表に示した数字は、種類毎に旬間の観察数をトータル

観察フィールド概要図 (道道尾岱沼一中春別線)



種 名	旬 平 均 カ ウ ン ト 数 (十は稀な出現数を示す)															営 巢 数 (推定)	備 考	初 認 日
	3 月			4 月			5 月			6 月			7 月					
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
アカハラ							3	7	5	3	6	3	5			5		5. 1
ツグミ	1	+		1	+	+												
ウグイス						+	2	2	2	1	1	1	1	1		(未)	2	4.27
エゾセンニュウ										2	8	11	5			8		6. 5
シマセンニュウ										+	1	2	5			4		6. 8
マキノセンニュウ										4	5	10	2			12		6. 5
コヨシキリ									+	12	22	21	15			観	24	5.30
エゾムシクイ							1	3	3	3	3	4	4	2		4		5. 8
センダイムシクイ								9	16	14	16	17	13			20+		5.12
キビタキ									+	3		2	2			察)	3	5.30
コサメビタキ									+	1	2	+				1+		5.30
エナガ	1	1	1	2	+	1		1	1	1		3				2		
ハシブトガラ	2	3	6	4	5	6	4	2	6	4	6	4	4			5		
コガラ		1	2	2	2	2												
ビガラ			1	1	+	1	1	1	1	+		1				1+		
シジュウカラ	2	2	4	2	4	2	3	2	2	1	1	4	2			4		
ゴジュウカラ		1	4	3	3	4	5	3	2	1		1				6		
キバシリ			1	+	1	+												
メジロ									1								野付小学校校庭	5.25
カシラダカ						2											渡去群	
シマアオジ									+	3	5	3	4			4		5.30
アオジ						6	31	31	42	31	20	11	10			27+		4.22
オオジュリン						+	+										♀のみ	4.18
カワラヒワ				1	3	9	6	7	7	13	4	5	6			5		4. 4
ベニマシコ				1	9	15	8	7	7	11	7	8	7			7		4. 4
ウソメ									+									
ニュウナイズメ							1	12	9	6	3	5	5			10+		5. 8
ズメ	18	14	16	17	17	22	14	16	13	13	16	16	19			10+		
コムクドリ							2	9	8	13	9	22				5+		5.13
ムクドリ				5	7	5	5	4	3	4	4	1	5			2+		3.26
カケス	2	1	2	2	+	1	+											
ハシボソガラス	16	5	7	4	8	8	6	6	6	5	6	5	4			4		
ハシブトガラス	3	13	13	14	13	10	9	11	6	7	7	5	12			3		

正直なところ、タシギとオオジシギの識別にはまる／＼とリム色の縦縞と一、二度つぶやいた声とからタシギと呼ばせてもらった。30羽程のオグロシギの群に、たった一羽だけ混って、採餌したり水浴びをしたり、休んだりしていた。昨年秋、ウトナイ沼でのことである。

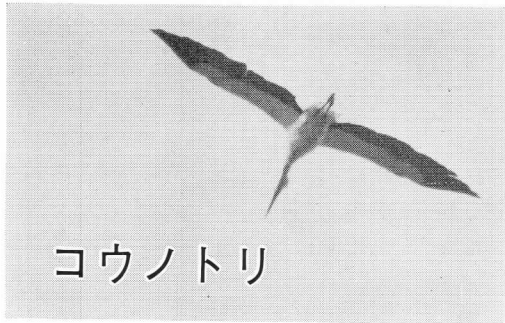
● 表紙のことば ●

タシギ

小山政弘

(恵庭市福住 492 教員アパート 2号棟)

と訊ねたい。それができなかったから、背にあるク／＼



コウノトリ

③ 野村 梧 郎

◇御 用 納

年末だが、幸いなことに列車は混んでいなかった。冬なのにコウノトリの箱はかなり臭う。関係のない人にはとてもでないが我慢の出来るものではない。時々もそもそと動くコウノトリを見ながら、この大荷物を持ち込ませてくれた国鉄に心から感謝していた。

札幌駅で異常な混雑になったら身動きが出来なくなることを恐れ、他の乗客に悪いが臭い大きな箱を出入口に引きずり出して札幌駅到着を待つ。駅に期待していた出迎えの顔が見当たらない。引きずることが出来た箱もステップに下ろすことが出来ない。万事窮したとき乗客の一人が手伝ってくれて窮地を脱する。この人に御礼の意味をこめてコウノトリの箱をのぞいてもらっている間も仲間が見えず、次なる運搬手段が気になる。

とやかくするうちに待つ場所を間違えたとかで係の全員が動物園のK課長とともに駆け付け、教育庁の天然記念物担当係も顔を見せる。こうなればもう出番はないのだが動物園までついて行き、生餌のドジョウを食うのを写真に写してから引きあげた。

係全員と揃って円山公園脇の小さな喫茶店でコーヒーを飲む。うまいコーヒーだと思いつつながら窓外を眺めると12月28日の一日は既に暮れなずんでいた。これが本当の御用仕舞というものかとその時しみじみ思っていた。

礼文島のコウノトリはその後多摩動物園に移り、中国産のメスと同じケージに入っているが、昭和51年の春に訪れたときはまだカップルになっていなかった。

◇再 会

昭和51年9月26日に本当に野生のコウノトリと30数年ぶりで再会した。新篠津村北6号地先の石狩川堤外地の土取跡の水たまりにカモが沢山来ていた。10月1日の狩猟解禁を前に下見にやって来たハンターのためカモの群れは飛び立った直後で、本来ならば場所を替えるのだがなんとなく虫が知らせたのか、鳥の姿が全くない水面に近い木の陰に隠れた。

しばらく待っている間にカモの群れが帰って来始めた。頭上を低空で素早く飛び抜けていくマガモ、カルガ

モ、コガモはいきなり水面に飛び降りボジャッ、ボジャッと水音をたてる。マガモ、カルガモが降り始めると水音は一段と高くなり、なんとなく周囲が騒然となる。

そのうち水面から飛び立てないカルガモを1羽みつけた。いわゆる羽抜けというのだろう、風切羽が生えそろわず、元気良く水面を走り廻るが、仲間と一緒に飛び上がることはできない。なんともかわいそうだがどうにもなるものではない。

カモ達が落ち着いてから、上空を飛び去るカケスやアオサギを見送っているうちに、石狩川の上流側からちょっと変わった鳥がやって来るのが目についた。アオサギにしては変だと思っているうちにこの鳥はコウノトリの姿になった。羽ばたきはゆるやかだが青空をバックに流れるように下流側に姿を消してしまった。

たしかにコウノトリだったと思いつつながらほんのしばらく待っているうちに、この鳥は下流側から姿を現し、上空を数回旋回し、最初姿を見せた上流方向に飛び去っていった。時間にしたら前後を通算しても1分足らずのものだったに違いないが、秋空をバックに翼を広げた白と黒のコントラストが見事な大きな鳥を見せてくれた、なんとも表現しようのない美しさは、忘れることが出来ない強烈な印象を残していた。

〔附記〕嘴打ち コウノトリは声帯を持たないといわれており、そのため音声によらずクチバシをカタカタと打ち鳴らして意志を伝達する。この音と大げさな身振りで愛情表現のためのディスプレイもやっている。

人工増殖 福井県、兵庫県に生息していた留鳥のコウノトリが事実上絶滅した現在、豊岡市と多摩動物園で人工増殖が試みられている。豊岡市には兵庫県にいたものの最後の生き残りの1羽も仲間に入っている。多摩動物園には、中国産のオスとメスに、沖縄産のメス、本道の礼文島産のオスがそれぞれ組み合わせられ、1組ずつ別々のケージに入れられている。この4羽の中では礼文島のオスが最も大きく立派な体をしていて、繁殖行動に入る気配は見せていなかった。

(おわり)



稚内から列車で輸送され、札幌に着いた直後のコウノトリ (昭和49年12月28日 円山動物園で)

手紙とはがまで作るページ

手紙とはがまで作るページ



★初認の報告に添えて

門崎和子

皆様、お元気ですか。明日からは早くも4月です。今年是一段と雪が多く、雪解けも遅れるのではと思いましたが、思ったより早く、南の面はほとんど解けて北側のみの残雪となりました。近くの林では、聞こえて来る鳥の声も多くなって来ました。昨日(30日)、団地内の緑陽公園でヒバリを見つけました。又、ヤマゲラの声と姿も白樺の木に見ました。では失礼致します。(3.31)

雨の日が続いて居りましたが、今日(22日)はやっと初夏らしい良い日でした。皆様にはお変わり御座居ませんか。こちらに引越して来てからは近くの公園を一人で鳥を見て歩いています。(5.22)

(札幌市東区南陽町2丁目1の11)

★さびしい巣立ち

山田良造

夏鳥たちの巣立ちのころですが、野鳥だよりを皆様の努力で楽しく読ませてもらっています。旭川は7月2日オオアカゲラ、7月6日クマガラ、ヤマゲラ、7月13日にはハイタカが巣立ちし、又来年を楽しみにしていますが、付き合ってきた鳥たちだけに淋しい思いです。残っているのはショウドウツバメだけです。(7.15)

(旭川市春光町2区3条 道警AP)

★私のフィールド

三浦二郎

札幌あたりは日照つづきの由ですが、暑さに加えてのつい先日までのマイク騒音に悩まされたことと拝察、当方天然クーラーききすぎて、野鳥の囀りも心なしか例年より元気がないようです。しかし今日は本当に久しぶりの青空、シマアオジ、コヨシキリ、それに夜の部のエゾセン、シマセンまで加わって窓からにぎやかな声かとび込んでおります。

お申し付けの原稿ですが、オオハクチョウでは時季はずれですし、野付半島のアカアシシギはもう少しデータがほしいところですので原野部の毎朝の観察をまとめてこのようなものにしました。これ程の生息密度のフィー

ルドは、最近の開発でどこでもそうざらにはないだろうと思いがつてのものですが……。

環境についての説明は省略しましたが、自宅から出発して0.5km位は荒蕪地で、ヨモギとヨシの優占する所で、カラマツの中径風衝木が中央に4本ばかりかたまっているだけです。シマアオジ、ヒバリ、ノビタキが目立ちオオジシギも多い所です。荒蕪地がきれいとカラマツの10年生位の植林地があり、それに続いてミズナラヤチハンノキの林地があって浄水場で1km地点です。森林性の鳥がかなり出現します。そこを過ぎると2km地点にある農家の牧草場が右手に拡がり、左手はずっとミズナラシラカンバーミヤマコザサの林地がつづき、草原性と森林性の両方の鳥が見られますが、案外生息密度は高くありません。農家の所で2km地点で、去年はそこまで折り返していたのですが、今年は牧草畑をすぎた保安林があり、そこはすばらしいフィールドです。結構大径木もあり、ほとんど原生林に近い林相で、生息鳥類の種類もぐっと増えます。ケラ類は4種類がほぼそろいます。ただ溪流でないので、コマ、コルリ、オオルリが出ないのは残念です。また常緑針葉樹がないのでウソ、ヤマガラ、ルリビタキが出ないだけです。記録に出ているウソは偶然出現したもので1日だけです。メジロについては原稿にも書きましたが、野付小学校の中庭にあるチシマザクラの花の蜜を吸いにきたもので、農家の人の話では自分の家の木にもきているということでしたので、加えた次第です。昨年観察できて今年出現しなかったのは、ホオジロ、ツバメ、コシアカツバメです。フクロウの死体がありましたが、夜の観察はやっておりませんので、当然だと思いますが除いてあります。

ということで、本当に間に合わせのような原稿で恐縮ですが、使えましたらよろしく。なお根室地方の鳥相全般については高田勝氏に執筆してもらおうようお願いします。(7.12 別海町尾岱沼潮見町203)

(本号トップの原稿とともに編集部あていただいた手紙を了解を得て掲載させていただきました)

★クッタラ湖のコノハズク

伊藤正清

野鳥愛護会の皆様方お元気ですか。私は室蘭で一人で探鳥をして、自分なりに観察しております。昨年6月中旬ごろ、クッタラ湖周辺においてコノハズクの巣を発見、木の周囲1.5mぐらいで、巣の穴は30~50cmぐらいありました。ヒナは3羽いました。詳しく知りたい方おりましたら連絡下さい。

(2.25 室蘭市みゆき町3-2-9みゆき荘)



次の通り野鳥愛護会主催の探鳥会を開催します。知り合いの方など誘い合わせの上、多数の参加をお願いします。

〈野幌探鳥会〉

◇とき 昭和52年10月23日 (日)

- ◇集合 国鉄バス「北海道女子短大前」停留所に午前9時までに集合。
- ◇内容 カラ類やキツキ類などの留鳥のほか、ツグミなどの冬鳥が見られます。紅葉のきれいな時季です。

〈ウトナイ湖探鳥会〉

- ◇とき 昭和52年11月20日 (日)
- ◇集合 午前10時までにウトナイ観光ホテル前湖畔に集合 (中央バス・ウトナイ停留所下車)
- ◇内容 ガン、カモ、ハクチョウ類が見られます。探鳥会には、昼食、観察用具、雨具等を持参して下さい。水辺の観察ですのでゴム長靴を着用して下さい。
なお、雨天の場合は中止します。

〈小樽港探鳥会〉

- ◇とき 昭和52年12月11日 (日) 10:00~14:00
- ◇集合 国鉄「小樽駅」待合室に午前10時までに集合。
- ◇内容 小樽港第3埠頭から船に乗り、小樽港内を探鳥します。オオセグロカモメ、カモメ、クロガモ、ホオジロガモ、コオリガモ、シノリガモなどが見られます。昨年は、オオハム、ウミスズメ、マダラウミスズメ、ケイマフリなどが見られました。
- ◇参加費 200円
- ◇持ち物 観察用具、昼食 (近くに食堂があります)
- ◇共催 日本野鳥の会小樽支部

◇その他 防寒の用意を十分にしてください。昼食は室内でとります。

〈藤の沢探鳥会〉

- ◇とき 昭和53年1月29日 (日) 10:00~14:00
- ◇ところ 札幌市南区藤野2区 「白鳥園」
電話 011 (581) 8317
- ◇内容 札幌の郊外「藤の沢小鳥の村」の小沢広記村長さん宅の給餌施設に集まる野鳥を観察します。アカゲラ、ヤマゲラ、シジュウカラ、カケス、ヒヨドリ、ツグミなどが見られます。暖房つきの室内から観察しますので、家族向きです。
- ◇交通 定鉄バス定山溪線「藤の沢」停留所下車し、白鳥園まで徒歩15分くらい。所要時間は札幌駅前から藤の沢まで40分くらい。合計約1時間。

- ◇持ち物 昼食、観察用具など。
- ◇参加費 200円
- ◇その他 雪が降っても行きます。昼食時にみそ汁を用意します。室内からの観察ですが、足まわりはゴム長靴が何かと便利です。

〈連絡先〉 札幌市中央区北4西5 (林業会館) 北海道国土緑化推進委員会内 北海道野鳥愛護会 (電 261-6022)

〈野幌私設探鳥会〉

- ◇とき 9月25日、10月30日、11月13日、12月4日 (いずれも日曜日)
- ◇集合 国鉄バス「北海道女子短大前」停留所に午前7時10分までに集合。札幌市内から参加される方は、札幌駅前から6時35分発江別行き国鉄バスを利用すると便利です。
- 〔幹事〕 羽田恭子 (電611-0063)
柳沢信雄 (電851-6364)

日本鳥類目録第5版には、次の2種について、北海道の記録がないので発表します。

●コアオアシシギ (成鳥1羽、77.7.29 ウトナイ湖畔) [観察者] 柳沢紀夫 筒井真 後藤基之 榊中律 羽田恭子

●コアジサシ (成鳥1羽、幼鳥1羽、77.7.30、鵜川河口) [観察者] 柳沢紀夫 溝部泰子 柳沢千代子

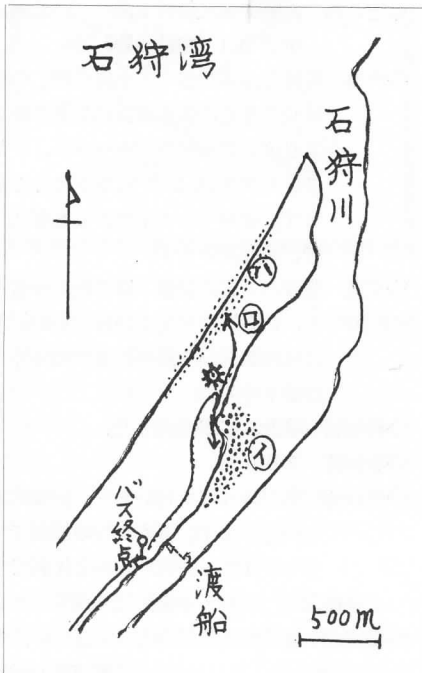
鳥の記録

羽田恭子

コアオアシシギにしてもコアジサシにしても、今までに、見たという話は聞いているのですが、正式な記録として残っていません。鳥類目録に北海道の記録がなく、観察したものについて、せめて仲間うちの野鳥だよりに発表しあいませんか。 (札幌市中央区円山西町491)

北海道探鳥地案内 鳥を探しに行きましょう

石狩川河口



▶位置 石狩町石狩川河口左岸及び日本海側一帯

▶交通 中央バスターミナル（札幌市中央区大通東1丁目）発、石狩行き、終点下車。バス賃片道280円、所要時間1時間。

▶探鳥地（主としてシギ、チドリの場合）バス停から灯台まで歩き（約20分）石狩川左岸に沿って干潟の所までもどる（図④）。干潟は広いときで川幅の半分くらいまで出るが（干満の時刻を調べていくとよい）、出ていない時は、途中ハマナスの生えている砂丘を横切り（図②）、日本海側の波打ちぎわを見る（図③）。

▶見られる鳥〈干潟〉メダイチドリ イソシギ ハマシギ トウネン シロチドリ アオアシシギ オオソリハシギ オバシギ ソリハシギ キリアイ サルハマシギ オグロシギ ツルシギ チュウシャクシギ ホウロクシギ キアシシギ ヘラシギ エリマキシギ タシギなど

〈その他〉ヒバリ ハクセキレイ ムクドリ カワラヒワ コヨシキリ ノビタキ オオジュリン ホオアカモズ ツバメ カルガモ マガモ コガモ ウミアイサホオジロガモ ウミウ クロガモ ユリカモメ アジサシ ウミネコ オオセグロカモメ カモメなど

これらの鳥は、季節によって種類、数の多少も違うので行ってみてのおたのしみ。

〈珍鳥の記録〉ハジロクロハラアジサシ（46.5.23）

カラシラサギ（47.6.27）カラフトアオアシシギ（47.6.9）など

日本海側は干満の差が少なく、広い干潟も出ないので鳥の数は多いとはいえないが、間近でじっくり見られる利点はある。鳥が少ない時は、一つの種をよく見て、その行動や飛翔時のパターン、声などを覚えるとよい。

シギ、チドリは、春は4、5月、秋は8、9、10月。冬季（12、1、2、3月）は、道も除雪されていないし、日本海側の風雪はすごいのでおすすめしない。もっともオジロワシ、オオワシ、ベニヒワ等にあえる幸運もないわけではないが。

▶地図 5万分の1石狩、2.5万分の1石狩

▶参考 野鳥だより4号、7号、8号、11号、13号
（羽田恭子）

鶴川河口

▶位置 鶴川町鶴川河口部一帯

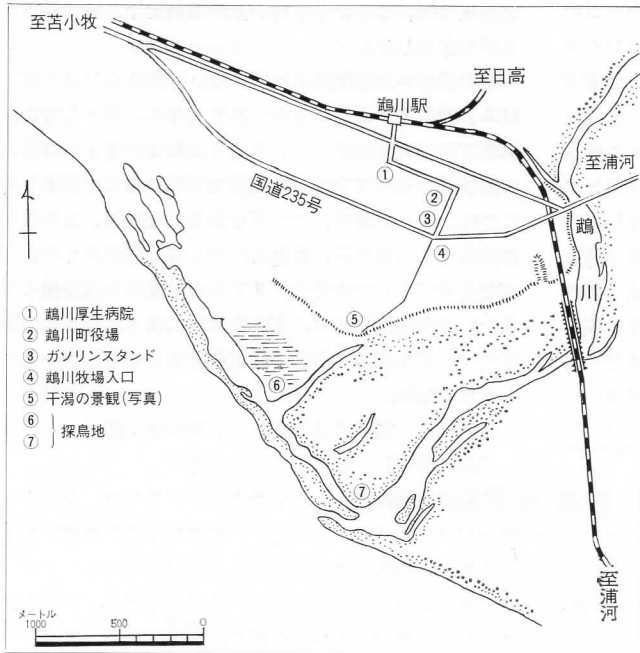
▶交通 国鉄日高本線「鶴川駅」下車（札幌からは急行で1時間半、急行料金込み往復2800円）

▶探鳥地 鶴川駅から駅前通りを真っすぐに進み、鶴川厚生病院前を左折すると間もなく鶴川町役場に出ます。役場から右折し、右手にグラウンドを見ながら進むと、すぐ国道235号線に出ます。道路脇に鶴川牧場と書かれた看板があり、この道を入れて牧場を横切ると鶴川河口の探鳥地です。観察の場となる河口近くの牧場には独立高木が数本あり、そのそばには牧柵があるので、柵に沿って行けば鶴川本流河口部に出ます。

鶴川駅から牧場入り口までは徒歩15分くらいです。鶴川駅から最も遠距離にあたる鶴川本流河口までは約3キロ、1時間ほど要します。



シギ、チドリ類が渡来する干潟環境（鶴川河口干潟）



▶見られる鳥 春から夏にかけて、シマアオジ、オオジュリン、マキノセンニュウなど北海道を代表する草原性の野鳥が見られますが、干潟環境の少ない北海道ではシギ、チドリ類の渡来地として重要な場所といえます。シギ、チドリ類の観察適期は、春は4、5月(下旬ころ個体数が多い)、秋は8~10月(9月の中ごろが種類

数が多い)ですが、種類によって渡来時期に若干のズレがあります。

これまで30種を超えるシギ、チドリ類が記録されていますが、一般的に見られるのは次のような種類です。

シロチドリ メダイチドリ ムナグロ ダイゼン キョウジョシギ トウネン ハマシギ オバシギ ミユビシギ キリアイ ツルシギ アオアシシギ タカブシギ キアシシギ イソシギ ソリハシシギ オグロシギ オオソリハシシギなど

〈比較的まれあるいはまれな鳥の記録〉ケリ(50.10.12)サルハマシギ コオバシギ ヘラシギ コアオアシシギ セイタカシギ(50.5.11、14、18)キンメフクロウ(49.5.5)など

〈その他〉マガモ、カルガモ、コガモ、ミコアイサ、ウミアイサなどのカモ類やハヤブサ、チゴハヤブサ、チュウヒなどのワシタカ

類などこれまで河口周辺で100種ほどの野鳥が記録されていますが、探鳥地としては、まだ歴史の浅い鶴川ですのでこれから何が見られるか楽しみな場所です。

▶地図 5万分の1鶴川、2.5万分の1鶴川

▶参考 野鳥だより第8号、19・20合併号、21号、22号、23号、25号 (梅木賢俊)

【編集部から】今号から毎回「探鳥地案内」を載せることになりました。今回は時期を考えて干潟にしましたが、草原、森林など道内であればどこでも結構ですので

探鳥地として興味ある所を紹介して下さい。要領は今回のものを参考にしていただければと思います。原稿を待っております。

ウトナイ湖 探鳥会

新妻 博



風が弱く、佳い日和でした。しかし、やはり3月、冷たい風が湖面を渡ります。プロミナーをのぞく顔がこわばっています。与えられる餌を求めてオオハクチョウが30羽あまり、湖畔のホテル駐車場の前に集まってきました。別の群れがユースホステルの前の水面で餌を拾っていましたが、上品な連中はずっと遠くの湖岸に残雪のように着いていて、いい眺めでした。湖岸を巡って来た若い男が、向こう岸にマガンがいますよ、と教えてくれましたが、グラスを当てるとぜんぶヒシクイでした。その数は500をくだらないと思われました。対岸の枯れアシ近くの水面にゴミみたいに群れているカモの間間は

オナガガモが主体。冷やかし半分、そしてオオハクチョウのおこぼれをちょうだいしているのはヒドリガモ、ヨシガモなど。陸地はさすがに淋しい早春の景ですが、ヒバリがいくつも湖上を低く渡って行くのが見えました。やはり春なのです。ハクセキレイ、カワラヒワなどを初認の

会員も多かったようです。この日のハイライトはツルシギです。赤い脚がよく見えました。オオワシ成鳥が1羽、オジロワシは幼鳥も含めて7羽、アオサギがもう来ていました。カモ類11種もいて、その識別の勉強には好都合でした。参加17名、それにお子さん3人のオマケがつきました。オマケといえば、解散後にマガン、アメリカチドリ、ハシビロガモを見た人がいます。002Yのカラーバンドを頸につけたコハクチョウもでて、あとからカメラをかついで駆けつけた白鳥の会の松井さんを喜ばせました。

【とき】 昭和52年3月27日 10:00~13:00

〔記録された鳥〕 ヒシクイ オオハクチョウ コハク
クチョウ ヒドリガモ オナガガモ マガモ キンクロ
ハジロ カルガモ ホオジロガモ ホシハジロ コガモ
ヨシガモ カワアイサ ミコアイサ ツルシギ オオワ
シ オジロワシ チュウヒ トビ アオサギ ハシボン
ガラス ハシプトガラス スズメ カワラヒワ マヒワ
ヒバリ シジュウカラ ハクセキレイ ヒヨドリ

(合計29種)

〔参加者〕 梅木賢俊 小野寺敬子 川辺正由 菅野
寿衛吉 土田純一 新妻博 野々村菊 羽田恭子 萩
千賀 平井さち子 早瀬広司 野口正男 溝部泰子 村
田信義 村田謙子 村野紀雄・道子・森・原・千草

福移探鳥会

羽田恭子

大通り市バスセンターからバスで30分。福移入り口で下車。ここは札幌市の北北東、豊平川が石狩川に合流するあたり。探鳥路には、牧草地、堤防、河川敷、水田などが広がっています。「ここも札幌市なの」と質問がでるほど静かな田園風景です。

朝方の大雨で、参加者は11人と少なかったのですが、遠路、苫小牧からいらした荻谷さん、早来の宮崎さんを迎えて、堤防に向かいました。途中、ノビタキの幼鳥連れの一家を見たり、電線で轉るホオアカを眺め、電柱にオオジシギのように止まるカッコウを見たり、モズやコヨシキリ、盛んに飛び交うショウドウツバメを見ながら堤防に上がりました。河川敷におりると、シマセンニュウ、オオジュリン、アカモズ、ベニマシコ、アオジなどが見られ、「この環境ならエゾセンニュウがいてもよいはずだ」と誰かが言えば、「いますよ」とばかり、すぐ足元でエゾセンニュウが鳴きだしたのにはびっくり。「ノゴマもいるはずだから、今の調子でノゴマもだして」と欲張りしましたが、これは聞こえなかったのか、ついに声を聞かせてくれませんでした。堤防にそって歩き草原に腰をおろして昼食にすると、アオサギはゆったりと南へ進路をとり、チゴハヤブサはスピードをあげて北へ向かい、イソシギの涼しげな声が聞こえ、フリユートを思わせるシマアオジ、虫のようなマキノセンニュウ、アジャパーのウズラの声を耳にしました。昼食後、アカモズがポーズをとり、オオヨシキリが大声で騒ぎだてるなかを、石狩川の川ふちまでおると対岸の崖にショウドウツバメの巣穴が無数にあいています。ざっと数えて400以上はあります。さきほどから盛んに飛び交うショウドウツバメの姿が見られ、川面すれすれに虫

を追っては、ひらひらと舞い上がる姿を十二分に見ることができました。

この日歩いた距離は4キロばかり。牛がのんびりと草をはみ、行き交う人も車も全くありません。我々だけのためにこの天地が広がっているような錯覚を覚えるほど、のんびりした所です。この場所で草原の鳥を十分楽しめたのは、土手の護岸、ヤナギを主とした疎林、あちこちに点在する小さな沼、これらがつくる自然が多くの鳥たちを見せてくれたのです。4丁目の雑踏からは想像もできないような静寂さは、130万都市に残された貴重な財産です。郊外に残る静寂の価値を考えさせられた一日でもありました。

〔とき〕 52年7月3日 8:30~13:00

〔担当幹事〕 野口正男・羽田恭子

〔記録された鳥〕 カッコウ カワラヒワ ショウド
ウツバメ ムクドリ スズメ コヨシキリ オオジシギ
ホオアカ モズ コムクドリ ハシボンガラス トビ
ノビタキ キジバト ヒバリ チゴハヤブサ シマセン
ニュウ オオジュリン ウズラ ベニマシコ アオジ
アカモズ オオヨシキリ エゾセンニュウ イソシギ
ハクセキレイ シマアオジ マキノセンニュウ アオサ
ギ キンクロハジロ 不明カモ8 (合計31種)

〔参加者〕 梅木賢俊 萩千賀 菅野寿衛吉 新妻博
柳沢信雄 宮崎政寛 荻谷昭道 溝部泰子 山口信子
野口正男 羽田恭子

鷓川探鳥会

新宮康生

今年秋の最初の定例探鳥会は、8月28日(日)、シギ、チドリの観察が目的の鷓川河口行であった。

鷓川駅集合が午前9時15分、札幌からの急行で降りた面々は9名、これに少し遅れて車でついた3名が加わって、今日は総勢12名での探鳥会となった。

心配された天候もどうやら持ちそうで、夏休みあけの久し振りの例会に一同双眼鏡やプロミナーを手に、次々と牧場の柵を越えた。

風がほとんどないせい、蚊やブヨ等の予期せぬ攻撃にあったが、牧場入口で早くもムナグロを見つけ幸先のよいスタートを切った。

快晴の探鳥会も気分がいいが、どういう訳か、余り天気が良すぎるとかえって鳥影が少ないようで、今日くらいの天候の方が多く見られるのではないかと、期待して先へ進んだ。

牧場下の入江干潟でオバシギ、ムナグロ、ダイゼン等を見ていると、グリーンとムラサキの美しいアオバトが

水を飲み登場して、色彩をそえてくれたので一同大喜び。

更に入江西側にそって進むうちに、オグロシギ、サルハマシギ、アオアシシギ等も次々と見ることができた。

入江反対側に行くためにUターンして、浅瀬で東側の牧場に渡り、鶴川河口の方へ進みながら30羽程のムナグロの群を見た。

羽田幹事のお話では、以前は入江西側の先端の方が鳥影は濃かったが、今年はこの東側から河口付近の方がよく見えるとの事であった。

苫東の開発工事や、沖合の石油探索、又釣人の増加等の影響なのだろうか？

牧場の先端で昼食をとっていたら霧雨が降って来たが大したことはなさそうなのでそのまま休憩と観察を続けているうちに降りやんだ。

1時半、ここで本日の鳥合わせをし45種を確認して、来た道を引き返した。

最近の探鳥会は今日のも含めて比較的人数も少なく、又新しい人達が見られないのは、何となく淋しい気がする。

る。初心者が気軽に参加出来る雰囲気や指導等、場所の選定も含めて探鳥会のあり方を再考する時に来ているのかも知れないと思った。

〔とき〕 52年8月28日(日) 9.30~14.00 曇

〔担当幹事〕 羽田恭子・新宮康生

〔記録された鳥〕 ムナグロ ダイゼン コチドリ シロチドリ メダイチドリ キョウジョシギ トウネンヒバリシギ ウズラシギ ハマシギ サルハマシギ オバシギ キリアイ アオアシシギ キアシシギ イソシギ ソリハシシギ オグロシギ タカブシギ オオソリハシシギ アジサシ ユリカモメ ウミネコ シマアジカモ(不明) アオサギ アオバト キジバト アカモズ モズ カッコウ ハクセキレイ ヒバリ ホオアカシメ カワラヒワ オオジュリン シマセンニュウ ショウドウツバメ コサメビタキ ムクドリ トビ チュウヒ ハシボソガラス スズメ(合計45種)

〔参加者〕 菅野寿衛吉 森拓人 萩千賀 梅木賢俊 野村悟郎 柳沢千代子 野々村菊 早瀬広司 早瀬富 羽田恭子 新宮八枝 新宮康生



◆野鳥の本出版 本会副会長の井上元則氏と土屋文男氏が相次いで野鳥に関する本を出されました。

北海道の自然1「野鳥」(井上元則著、北海道新聞社980円)クマガラ、エゾライ

チョウなど北海道に住む鳥たちについて、1種類ずつ読物風にまとめられており、楽しく読める本です。

原色生態図鑑「北海道の野鳥」(井上元則著、北海道タイムス社 1500円)比較的目に触れやすい187種について、写真とともに生態、分布、形態の説明があり野鳥観察入門書として必携です。

北の鳥南の鳥(土屋文男著 700円)「野鳥」「動物文学」などの雑誌に掲載されたものから選んで、豆本にまとめたもので、豊富な知識と経験がにじみ出ている本です。

◆第1回野鳥分布調査について 28号鳥民便りでお知らせしました通り、当会では企画部と編集部合同で道内各地の会員の方約200人に調査員を委嘱し、今年度を第1回とし初認記録12種、分布図作成4種について調査しました。その結果71人の方から報告をいただきました。現在集計中で、早ければ30号で分析・結果報告ができると思いますが、報告がまだの方、いまからでも結構ですでお送り下さい。また今後毎年、調査を実施致しますので、来年以降調査員を引き受けて下さる方は早目に連絡下さい。特に北見・紋別地方、名寄・士別地方に本会会員がおらず、空白部分になっ

ております。野鳥に興味をもっておられる方、観察されている方等ご存知の方は連絡下されば大変ありがたいのですが、以上、会員の皆様のご協力を切にお願い致します。

◆おわび 28号11ページ左段、決算報告中、収入額が789,248円となっておりますが、489,248円の誤りです。慎んでおわびし、訂正致します。

◆原稿・写真・カットをお送り下さい 原稿が少なく編集部では困っています。随筆、観察記録などなんでも結構です。どんどんお寄せ下さい。又、今号から皆さんから送られてくる手紙・はがきでつくる「さえずり」のページを設けました。この「さえずり」のカットと手紙、はがきをどんどんお寄せ下さい。「野鳥だより」が会員の皆さんによって守り立てられていくよう願っております。(編集部)

◆イギリス野鳥研究所視察とデンマークの旅へ一緒にしませんか 日本白鳥の会副会長である松井繁氏の呼びかけでイギリスの野鳥視察ツアーが企画されました。日時は昭和52年12月25日(日)~53年1月4日(水)の11日間。費用は25人以上まとまると39万円で、現在19人ほどの申し込みがあります。主な日程としてスリムブリッジ野鳥研究所などの視察のほか自由行動日が比較的多く組まれているため、今までの野鳥ツアーとは違ってゆっくり探鳥が楽しめます。詳しくは小川巖(札幌市北区北9西9 北大農学部応用動物学教室 電話 711-7611 内線2491)までお問い合わせ下さい。

自照のとき

夕海霧中一光芒の鶴のこゑ
瀉照りに消えさう鶴のひとり子や
残り鴨自照のときかたたずめる
海霧冷えや両袖あげて鶺鴒の倦めり
ささらだつ牧の青空大地鳴

平井さち子

ウトナイ吟行

雪鮮湖に群れ白鳥のふくみ声
翔つときがきて白鳥の大水輪
雪しろのさみしさ増やすはぐれ鴨
白鳥の多辨や夕日すぐ凍る
白鳥へ夜明の方へ男佇つ

木村敏男

〔編〕〔集〕〔後〕〔記〕

★けたたましい「ヨタカ」の鳴き声を夏の風物詩のように聞いたのもつかの間、くさむらに秋のムシがにぎやかな頃になりました。私に「鳥の世界」を教えてください。溝部さんが東京に行かれます。どうぞいつまでもお元気で。(飯山)

★鳥が目立たない8月、退屈な8月がおわりいよいよ9月。シギ、チドリをはじめとしてこれから冬鳥、旅鳥が渡来してきます。夏鳥の終認記録、冬鳥の初認記録をお寄せ下さい。レンジャク、イスカ、ベニヒワ、今年の冬鳥の渡来はどうでしょうか。記録は一つ一つがささいでも、たまると非常に価値のあるものになります。野鳥だよりを記録帳にするつもりで、身近な鳥のニュースをお寄せ下さい。(藤巻)

★最近BTO(英国鳥類協会)から英国とアイルランドの鳥類繁殖図が出版されました。10km四方を一區画として繁殖の有無が一目で分かるように示されており全域では数千点に及ぶのにもかかわらず、全国を網羅しているその組織力に驚かされる。本会も彼我の違いは余りに大きいとはいえ、その第一歩を踏み始めた。初認、終認記録、分布の記録を今後も引き続きよろしく。(小川)

★夜空に渡り鳥の声を聞く季節になりました。今年の夏はいつになくユウウツでヒマな夏でした。家の近くで初めてアカモズが営巣し、無事ヒナが巣立ったのが唯一の収穫で、ここ数年(連続4年間)姿を見せ営巣していたヤマセミが今年は姿を消しました。このヤマセミの夫婦は「小鳥の村」のガケで営巣し、毎年一羽ずつヒナが巣立っていたのですが、今年はガケの下で宅地造成が行われ、団地が出来てしまいました。4月

頃には巢穴の下見に姿を見せていたのですが、ブルドーザーに威嚇されたのか、営巣をあきらめたようです。このガケはヤマセミの巢のそばにカワセミの巢もあり、キセキレイも繁殖していました。小鳥の村の小沢さんと一諸に大事に見守ってきたのですが、残念です。ガケの下の川で好んでとまっていた木も切られてしまったので来年も期待できないでしょう。有名な「小鳥の村」もこの有様で、周囲がどんどん開発され、このままでは、小鳥の村の山も孤立してしまいそうです。何とかしなければと思っています。

最近、原稿の集まりが悪いようです。今回の発行でも森編集長、頭を痛めていました。どんどん原稿をお寄せ下さい。(小堀)

★5月末に札幌市西区の発寒川畔でフ化したイソシギは、10日ほどたった6月中旬、すっかりたくましくなり、近くを人が通るとかなりの勢いで走るほどに成長していました。夏たけなわのころ、彼らの姿は探しづらくなりましたが、7月の末ころには日暮れて間もない空から、イソシギのピリィリィ、ピリィリィという涼しげな声が聞こえてきました。移動が始まったのでしょ。そして今、あちこちの干潟ではシギ、チドリ類がにぎやかです。(梅木)

★ただ今、野鳥マップ作りの報告を整理している真っ最中。協力していただいた調査員の皆様に感謝致しております。ただ、空白地帯がまだまだ多く、全道的に会員を増やさなければと切実に感じています。何年後かに精密なものを作るため、調査とともに会員増の面でも協力していただけたらと思っております。

今号、原稿が足りず頭を抱えました。写真、手紙、はがき、随筆、記録、カット、意見、叱咤 etc. etc... 原稿の山に埋まった夢を見たいものです。(森)